

心の故郷・仙台

(一) 仙台への疎開

中村 アキヤ

「ああ、アキヤ君か？ 私は大丈夫だ。が、永井君と井沢君は行方不明のままだよ」

平成二十三年の東日本大震災のあと、心配で何回も仙台在住の恩師曾我先生に電話したが全く通ぜず、五日後にやっと連絡がとれたのだった。

私は国民学校二年の秋に激しくなった空襲を避け、新宿区の天神国民学校が草津に集団疎開したのとほぼ同じ時期に、父の転勤に伴い、所謂、縁故疎開で仙台に引越した。その後中学二年まで六年間も仙台で生活することになる。

両親と、六歳、四歳の二人の妹の夫々の身の回りのものと、鍋釜を詰めた二個の大きな風呂敷包みが引越し時の手荷物の全てであった。

当時は旅行といえども、男は戦闘帽にカーキ色の国民服、女は手拭の姉さん被りにモンペ姿だった。朝、旧型の蒸気機関車に引かれ上野を発ち、夕方郡山に着き一泊した。

灯火管制下の暗い駅前から、その頃は珍しかったリンクタクに分乗して市内の旅館に着いた。父親が仙台の軍需監理局の繊維担当だった関係で、軍手や軍足などの生産物資を回して欲しい現地の繊維業者が、全ての手配をしてくれたものらしい。旅館での広い風呂場も、個々に小卓が付く食事も八歳の坊やにしては初めての経験で印象に残っている。

翌日仙台には午後早めに着いた。そこでも出迎えの業者はいたが、駅から四十十分ほどの引越し先にゆくのにバスもタクシーもなかった。偶然、父の役所の局長が駅前で車から降りるところに出くわし、頼み込んでカーキ色に塗られた大型のフォードのような車で、家族を家まで運んで貰った。

家は市内西端の、作並街道の入り口に近い、大崎八幡宮と広瀬川の間位置する北五十人町（現在は青葉区八幡一丁目）の四部屋の借家だった。電気・水道はあったがガスはなく台所の戸をあけると二坪ほどのトタン屋根の土間と釜戸があり、古新聞紙と薪とで毎日の炊飯を賄うことになった。

風呂は竈から数歩離れた小屋で、風呂桶に直結した釜の煙突の途中から薪をくべるテッポウと呼ばれるめずらしいものだった。

二日後、母と共に名門といわれる宮城女子師範の付属国民学校を訪ね、教官

室に案内され禿げ頭の教頭先生に会った。

「定員一杯でこの時期の転入は無理です」という教頭に、強気な母は「それではテストだけでもして見て下さい」と粘った。

誰もいない教室に通されて国語と算数の問題を手渡された。東京の学校は教育進度が早かったのか、国語も算数も習った問題ばかりで、どちらも満点近くの成績だった。成績を見て教頭は「うーん、ちよつと主事先生と相談します」とのこと、翌日からの転校がきまった。

一学年に教室は男子と女子のふたクラスだけで私は三十人ほどの二年男子組に配属された。クラスメートの半分は地元の出身で、あとの半分は今という転勤族の子弟であった。

校内で、半ズボン姿で通学し、母親を「オカーチャマ」と呼ぶ子は私一人だった。慣れない疎開生活がはじまった。昭和十九年のことである。

(二) 疎開つ子

東京育ちの子供にとつて、近所の子供達からのイジメは酷かった。県立の宮城師範付属国民学校に入れなくて、近くにある仙台市立八幡町国民学校に入学した洩垂れ小僧の集団が近所について、脅威であった。

常に七、八人で行動し、私を見ると疾風のように走ってきて、ウムをいわさず殴りかかるのである。疎開つ子は鼻血を流し、泣きながら家に逃げ帰るのが常であった。通りがかりの大人は見てみぬ振りをして、誰も助けてくれなかった。

当時の仙台の冬は厳しかった。降雪も頻繁で、一晚に三十センチは積もり、日陰に積もった雪はそのままガリガリに氷結し春まで溶けなかった。底の擦り切れたズック靴は直ぐに浸みて、帰宅後に炬燵に足を突っ込み、靴下を乾かすのが日課だった。入浴後の手ぬぐいが見る間に棒状に凍り、毎朝ガラス窓には氷の花が咲いた。

霜焼けで手足はパンパンに腫れ、やがてひび割れになった。防空頭巾が防寒具との兼用だったが、両耳とも霜焼け部分が膿んで、耳の形が崩れた。

学校から、「中村君に長ズボンをはかせてください」との手紙を持たせられたが、長ズボンがないので父親のズボン下を縮めたものの上から半ズボンを穿かせられた。

学校の教室の隅にストーブがあったが、燃料の亜炭は不足勝ちで、みな粗末

な防寒着のまままで授業を受けた。寒いので四六時中足を動かして貧乏ゆすりをしないではいられなかった。弁当の凍結防止のために、ストーブの周りに金網製の弁当置き場があり、弁当が暖まる良い置き場所をとるために早く登校した。

ひと冬過ぎて、三年生の新学期からは、教室での授業は極端に減り、校庭を掘り返して芋を植えたり、自生するクローバーを乾燥して、飼料用に供出した。飛行機の潤滑油に使うヒマシ油を採るためトウゴマという植物を植えさせられた。

もう母親を呼ぶのに、オカーチャマではなく、カアチャンと呼ぶようになった。

その頃から塩釜や石巻の港、仙台市では亀岡八幡宮近くにある第二師団の高射砲陣地への、米艦載機による散発的な空襲が始まっていた。

(三) 仙台空襲

忘れもしない昭和二十年七月九日。

日中は普段と変わらない夏の日だった。その日の夕方、父と市内に住む父の役所の同僚とで広瀬川に鮎釣りにいった。かしこぶち（賢淵）という深いトロ場があり、毛ばりを使ったドブ釣りで、十センチ大の稚鮎が魚籠一杯釣れた。

帰り際に父が、同僚のおじさんに、「これは秘密事項だが市内に、『仙台よい町森の町、七月十日は灰の町』というビラが撒かれているそうさ。もし今夜にでも本当に空襲があったら、私の家に来なさい」といって別れた。

翌朝未明、眼を覚ました母が「大変だ。大火事だよ！」と絶叫した。市の中心部の市役所方面の空は一面真っ赤で、黒煙に混じって無数の火の粉が舞っている。この夜、百二十機のB二十九が二十波に分かれ約十一万個の大型焼夷弾を無差別に撒き散らしたのだ。不思議なことになんの音も聞こえないまま全ては進行していた。

子供達は、押入れの上段に布団を積み、その下段に避難するように父親から指示された。七歳の上の妹は母親から、五歳の下の子が泣いたらこれを口にいなさいと味噌の塊を手渡された。私は興奮して何回も庭で小便をした。上空には火炎に映えた三機編隊の敵機が悠然と旋回している。キラキラ光る機体からパラパラ何か落ちてくる。突然、前の家の板塀に焼夷弾が落ち火炎が音を立てた。

隣組の消防隊長だった父がとてつもない大声で隣人を指揮し、湿った筵と砂

をかぶせて延焼を防いだ。数軒先の二階家からは火炎が高く上がり屋根が崩れ落ちたが、周囲には誰も人影がなかった。

以前から町内で、空襲に遭っても決して逃げずに、協力して消火活動を行う約束だったので、広瀬川の河原に逃げた人たちが帰ってきた際、父が怒鳴りつけていた。我々の町を狙った焼夷弾は風に流されて広瀬川に落ち、河原は焦熱地獄と化して、大勢の人が焼死したそうだ。

数時間ほど経ち夜が明けると、前夜、釣に同行した人が、家族とともに現れた。空襲警報もなく気付いたときは、周囲は火の海だったと言う。これらの人達に続いて、市内で焼け出された人々が、疲れ切った足取りで家の前を通る。

私は炊き出しを命じられたが、薪が湿っていてなかなか着火しない。父が焼夷弾についていた油脂を持ってきて「これを薪につけるとよく燃えるぞ」と言った。(この焼夷弾は着火した柔らかいゴム状の油脂が木造家屋に貼り付いて、水を掛けても簡単に消火しない構造になっているのだ)

母が、家の前で嬰兒を背負った若い女を呼び止め、赤ちゃんにおも湯をのませ、お母さんにおにぎりと言浴衣を持たせて「オシメに使いなさい」と言っている。

近所の金子さんという、母と仲良くしていた小母さんが駆け寄ってきて玄関でしゃがみこみ母と手を取り合って泣いていた。その時は空襲の一夜が無事に過ぎて、小さな子供を持つ母親同士の安堵の涙だとは気が付かなかった。

翌日、同居していた叔母と市内の状況を見に行った。くすぶっている焼け跡には水道管だけが原型を保ち、チョロチョロと水を吐きだしている。焼け出された人たちが、真っ黒な顔で焼け残った家財を整理している。賑やかだった東一番町の繁華街の店舗や家屋はほとんど焼け落ち、焼け残った箆笥や台所の流しのみがそれと判る有様。玄関と思われる場所には黒焦げの下駄や靴が散在していた。

人形大の丸焦げ肢体を見かけた。膝の関節の丸い、白い骨を今でも鮮明に覚えているが、叔母が「猿の死体だわ」と言った。いま思えばそのころ猿を飼っている家がある訳はない。叔母は私がショックを受けないように気を遣ったのである。

(四) 敗戦

一カ月後の八月七日にソ連が参戦。我々は、その前日に広島に新型爆弾が落ちたことは知らなかった。父は地方の軍需工場に出向き「日本は絶対に勝つ」と督励して帰宅したばかりだった。

直立不動の姿勢でラジオの詔勅を聞いたが雑音で内容は聞き取れなかったが、母が泣きながら「戦争に負けたんだよ」と言った。

「日本人は軍部にだまされていたんだ」と昨日まで皇軍不敗を叫んでいた新聞が書きたてた。

夏休み後の新学期は、これまでの国語と修身の教科書に墨を塗ることから始まった。新着の教科書は新聞用紙の裏表に印刷されていて、手順よく畳むとA5版十六ページの薄い教科書が出来上がる仕組みだった。

夏休み前の一学期の終業式で「日本は絶対勝つ」と断言していた担任の先生が、一学期になると「それでは算数のブックを開いて」と言ったのには驚いた。

続々と兵役から先生方が復員してきた。九十九里で塹壕を掘ったり、松島で水上飛行機の整備をしたり、江田島の海軍兵学校戻りの先生もいた。軍服軍靴の先生方は直ぐに殴るので怖かった。

その中に、このシリーズの冒頭に電話した曾我先生が居られた。仙台弁丸出しで、甘党の先生は、分数を教えるときは必ず羊羹の絵を描いて説明した。

サントニン駆虫剤を配布したあと、回虫が尻から出るときはこうして引つ張れと、四つ這いになって教えてくれた。先生の実家は名取郡増田町（現在の名取市中心部）の農家で田圃に囲まれていた。近くに貞山堀や八間堀があり、担任になってから良く泊めてもらって鮎釣りをした。（その周辺は今回の津波で完全に水没した。）

一方、敗戦後の食糧難は益々酷くなり、食事は馬鈴薯や薩摩芋入りの麦雑炊が主で、時には蒟蒻や大根の葉で増量されていた。兄妹で順繰りに日を決めて、一人で鍋の底にこびりついたおこげを食べるのが楽しみだった。

米の配給はなく、その頃大漁だった鱈が配給になった。五人家族の一週間分の食料がカマスに入った塩漬けの鱈（仙台ではカドと呼んだ）でそのころは連日三食とも馬鈴薯と鱈だった。

また米国支給のキューバの黄色いザラメの砂糖は主食にはならず、重曹と混ぜてカルメ焼きをつくり、スカンポの茎を噛んですっぱい汁で空腹を紛らわした。玉蜀黍の粉や乾燥リングゴも配給になったが主食としては用を為さなかった。「アメリカのダレスさんのお蔭で食べ物を戴いた」と教えられたが、いま思えば家畜用の余剰穀物を救援物資としたのは当時のダレス国務長官だった。

近所の人に教えてもらって、庭に狭い菜園を造った。玉蜀黍、馬鈴薯、枝豆などの穀類や白菜、小松菜、ほうれん草などの栽培だ。化学肥料などはないの

で、柄の長い柄杓を買い、自家の下肥を掬っては施肥した。始めのうちは嫌だったが、収穫が近づくにつれ臭気が気にならなくなった。

卵を目当てに鶏を三羽飼い、菜っ葉にミミズや米ぬか、砕いた貝殻をまぶしたものを飼料として与えた。卵は納豆に混ぜ、味噌汁で増量して朝食のおかずにした。野良猫が徘徊して鶏を狙うので鶏小屋の金網の修理を怠らなかったが、ある晩一羽が獲られてしまった。「ケーケー」という悲鳴とバサバサという羽根音がだんだん遠ざかってゆくのを布団の中で聞いたが、真夜中の戸外にでるのが怖くて見逃してしまった。それ以来猫が嫌いになった。

どの家でも干し芋をつくり、干し柿をつくった。隣家の中学生のお兄さんは空腹のため柿の皮の干したものを食べ過ぎて胃潰瘍になった。

そのような状態でもたまに入手した米の一部を母は厚い本のケースに詰めて東京の実家に送っていた。小包みの内容物の欄に書籍と書いていたが、誰もそれと信用していなかったであろう。

母の着物を食料に交換すべく、母子で作並街道を数時間歩いて山間の農家を訪ね歩いた。そこで貰った白米の握り飯を頬張ったのを覚えている。

仙台駅に進駐軍がくるというので恐る恐る見に行つた。五十人ほどの兵士がリラックスして屯していたが、一端命令が下ると整列して人形のように微動だにしなかった。彼等はアイロンの良く利いた軍服を着てピカピカの靴を履いていた。

米兵は規律正しく、陽気で日本の兵隊のように怖くはなかった。婦女子はみだりに外出してはならない。男は立小便してはいけないなどの通達があったが、ジープに乗った米兵を見ると子供たちは近寄ってチョコレートやチューインガムをねだった。私はチューインガムという、飲み込まずに吐きだす食べものを初めて経験した。

近所の駄菓子屋にいつて「チューインガムありますか？」ときいてもどの店も「そんなものはねえ」との返事だった。

(五) 戦後の生活

この終戦の年の冬、五歳の妹が肺炎に罹り、四十度の高熱が続いて危なかった。東北大病院の医師が、一般には手に入らないペニシリンという特効薬があると話した。父が奔走して進駐軍の医師からアンプルを入手し、妹は一命を取り止めた。

翌年になると市内の焼け跡に、テント地とトタン屋根からなる闇市が形成され、放出の缶詰や洋モクなどが店頭に並んだ。米兵から貰ったチョコやチューインガムを売っている浮浪児も多かった。この頃学校では脱脂粉乳の給食に新顔のコッペパンが加わり、時々物資の配給があつて、抽選で鉛筆や消しゴム、ノートなどの文房具がもらえた。特選があたるとゴム靴とか靴下とかが支給された。

ダンサーと呼ばれる米兵相手の女性の、原色のスカーフやハイヒールを見て疎ましく思ったが、彼女らは殆んどが、子供たちの戦争未亡人で専用の託児所に寝泊りしていた。カーテン用の布地が配給されると、彼女達のドレスが一樣にカーテン柄になった。

昭和二十一年、四年生になって、仙台市郊外の野蒜海岸で初めてのラジオの街頭録音があつた。地元の人はマイクを向けると逃げてしまうので、私が地元の子に扮して出演した。これが縁で私はNHK仙台局の児童放送劇団に入り、子供ニュース、子供二重の扉などの番組のレギュラーになった。出演料は鉛筆一ダースとかノートだったが当時は貴重品だった。

この年の夏休みに、出張する父に同行して東京の祖父母に会いに行った。上野から歩いて秋葉原まで行き、秋葉原から新宿まで市電に乗った。道路の両側は瓦礫の合間にバラック建ての商店が散在し、背丈ほどの雑草が焼けた地面を覆っている殺伐たる風景が続いていた。

周囲の家々は完全に焼けてしまい、祖父母は辛うじて焼け残った土蔵造りの倉を改造してそこに暮らしていた。二階には復員した小父がいて「アキ坊か、大きくなったなあ、戦争に負けて御免なさいね」とあいさつされたことを覚えている。

高台にあつたその家から、夕暮れ時には富士山をはじめ丹沢山塊から奥多摩の山々までのシルエットが良く見えたものだ。

仙台に戻って、遊びに行った近所の友人の家から犬の子を貰った。フォックステリア系の雑種のメスで、身体は白黒の斑だが鼻筋が白く両眼のまわりが黒で茶色の目をしていた。「余計なものを貰って」と母からえらく怒られた。

どこに行くにも付いてきて、学校の中は勿論、市電の中にも飛び込んできて車掌を慌てさせた。広瀬川の中洲で行われた学年の芋煮会では、全員注視のなか、対岸から川を泳いで渡って来て喝采を浴び、近所で有名になった。

デイジーという名のこの犬は我々一家が東京へ越すときには、檻にいれられ

貨物列車で上京した。

放課後はほとんど毎日この犬を連れて、歩いて十五分ほど離れた広瀬川に遊びに行った。牛越橋という毎年台風のたび流される木造の橋があった。

やや上流にあった三居沢発電所の放水路には大きなウグイ、ハヤなどが見えるのだがなかなか釣れなかった。この発電所は日本で最初の水力発電所だと後で知った。

山手の大崎八幡宮の裏手は田圃になっていて、空き缶で作った柄杓で泥を掬うと小さな泥鰌がいくらでも捕れた。

その頃は知らなかったが正月のどんと祭や流鏝馬のあった藁ぶきのこの大崎八幡宮は桃山時代の建築物とのことで今では国宝である。

(六) 上級生になって

五年生から男女混合のクラスになった。坊主で丸顔の私は早速女の子からジヤガイモなるあだ名を貰った。担任が曾我先生になり私は卒業まで二年間、二人の妹もこの先生に一年間ずつお世話になった。戦後二年を経過し、国全体がそれなりに軌道に乗り始めた。

その頃になってPTA活動がはじまった。三十歳前半の母は二、三人の同世代のお母さん方と組織造りと活動計画の作成に頻繁に学校通った。それが縁で若い先生方が我が家に顔を出すようになった。官吏だった父が業者から贈られた日本酒が目当てであったようで、先生方は遅くまで大声で討論していた。そのためか中村の三兄妹は成績もよく、国語の先生の推薦でNHKの子供の時間に母の書いた児童劇に三人で出演したこともあった。

五、六年の夏休みの臨海学校は石巻市の渡波小学校に寝泊りして行われた。

(この校舎も津波で壊滅した)

石巻港の岸壁に棲んでいる渡り蟹を獲ったり、朝夕に砂浜で海に向かってハサミを上下している汐マネキという小蟹を獲っては焼いて食べた。

また、先生のお供で女川漁港に出かけ、揚がったばかりのカツオを船から直接買って、尾に紐をかけて持って帰った。当時はポリ袋なんて便利な包材はなかった。

鮎川港では、金華山沖で獲れた二頭の鯨を船尾につけ、誇らしげに気笛を鳴らしながら捕鯨船が入港してきた。長刀を持った作業員がウインチの力を借りて厚い鯨の皮膚を剥がすとモウモウたる湯気が立ち、内臓を開くとダンブ数杯

分のオキアミが出てきた。まだ温かい鯨肉を荒縄でぶら下げて宿舍に帰り、刺身と焼肉を鱈腹食べた。

クリスマス近くになるとプレゼント目当てに教会の日曜学校に通った。日本で赤い羽根共同募金を提唱し、「少年の家」で有名なフラナガン神父が訪仙した際、私達の教会に立ち寄った。その時、私は神父様に花束を上げる係りだった。今でも彼の名刺を大切に保管している。

学校では昼休み時間は勿論、放課後も野球に明け暮れた。グローブもミットもないので、ゴムマリとバットで、人数が足りない時は三角ベースで暗くなるまで遊んだ。一リーグ制の職業野球が人気で「野球界」という雑誌を回し読みして楽しんだものだ。

仙台市内には評定ヶ原野球場という小さな球場があつて、年に数回プロ野球の試合が行われた。試合開始二時間前の開場に合わせて、少なくとも二時間は行列して順番待ちをした。夏の観戦の際は一本十円のアイスキャンデーを何本舐めたか覚えていない。

私はそこで幸運にも、赤バットの川上選手の一インニング二ホームの快挙を目のあたりにした。昭和二十三年五月十六日のことである。

当時はタイガースの黄金時代で、私は若林、土井垣のバッテリー、藤村、別当などの打撃陣に魅せられて、以来ずっと阪神ファンだ。

この頃は、貧しくはあつたが、みんな元気で、精神的には決して貧困ではなかつた。

(七) カレーライス

仙台での楽しい時期はあつという間に過ぎた。中学二年になって父が官吏を辞め、民間の会社に移ることになり、我々一家も六年間お世話になった仙台を離れ、帰京することになった。

ご縁があつて我々三人兄妹の夫々のクラスの担任教師を勤められた曾我先生は、送別会をするからといって三人を自宅に招待してくれた。教え子の父兄の離れを借りて改造した小さな家だった。

「先生はな、貧乏たらしだから、立派な送別会はやれねんだ。その代わり一生忘れられないような送別会をやっからな。今日の肉は牛肉だぞ。ドッサリへえったカレーをうんと作ったから、死ぬ程食べてけれ」先生はこう言つて山盛りのご飯の上に、具の多いカレーをかけ我々兄妹に勧めるのだった。そして最後にこう言つた。「アキヤ君は東京さ行つたら、日比谷高校さへえれ」

あれから六十年経った。これまでも数回、仙台の小学校のクラス会に出席した。付属中の卒業生はみな優秀で、地元のロータリークラブや商工会の理事長などの重鎮になっていた。先生に一昨年お会いした時に、奥様を亡くされ、ご本人も九十二歳になったと教えられた。なんだかお身体全体が小さくなったように感じられた。

今回の大震災で、子供のとき遊びまわった海岸や港が、壊滅的打撃を受けたことを知り、忘れていたその頃の記憶が急に蘇った。両親が東京と横浜出身だったので所謂田舎をもたなかった少年が疎開とは言え多感な少年時代を過ごせたのは幸せだった。小学校時代を過ごした仙台こそが、我が心の故郷であり、曾我先生こそ私の人間形成期の恩師である。

それにあの広瀬川の清流だ。赤ふんどしで飛び込んだ碧潭、水中メガネとヤスを持つてのドンコ獲り、石の間に張った薄氷を長靴で割りながらの雪合戦。

講武所とよばれる広場を抜けて月見草の咲き乱れる河原を、父は末の妹を自転車の荷台に乗せ、私と上の妹が母の両手にぶら下がって、歌をうたいながら歩いた情景を懐かしく思い出す。

以上のことは私の妻にも、二人の息子にも話したこともない。親から子へ語り継ぐことが少なくなったこのご時勢だから、せめてもの思い出を、この機会に書き綴っておこうと思った。

「先生さ会いに、また仙台さ行くからね。長生きしてけれし。あんときのカレ―ライスはまだ忘れてねえかね」

(8808字)